

# 小中連携を意識した中学校英語の改善

渡邊時夫・高梨庸雄・齋藤榮二・酒井英樹 [著]

Watanabe Tokio Takanashi Tsuneo Saito Eiji Sakai Hideki

最新刊

A5判 208ページ 定価(本体 2,200円+税)  
ISBN 978-4-385-36280-9

小学校外国語活動と中学校英語科を連携させ、「実際に英語が使える子どもたち」を育成する英語教育を、実践重視でわかりやすく紹介。中学校の英語教科書の内容を取り上げながら、その活用の仕方を具体的に提案します。

## もくじ

- 第1章 外国語活動の概観 — 英語教育の小中連携のために
- 第2章 外国語活動担当教員と中学校英語教員・生徒の意識調査
- 第3章 中学校英語教育の質的向上のために
- 第4章 教科書を使っての具体的な指導
- 第5章 中学校卒業時に期待される英語学力について



# TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

## 特集 力をつける帯活動

|                    |          |
|--------------------|----------|
| 巻頭エッセイ             |          |
| あなたのカウントダウンは、いつから？ | 奈良橋陽子 01 |
| 帯活動 — その正体と魅力      | 松沢伸二 02  |
| 「フリートーク」で表現力を育てる   | 小松原唯弘 04 |
| USE Readへ繋ぐ語彙習得    |          |
| — 単語クイズを使った4ステップ — | 吉永早紀子 06 |
| 表現活動につなげる帯活動       | 竹原春祥 08  |
| ライティングのプロジェクト型の帯活動 | 神原克典 10  |

## 連載

|  |                   |
|--|-------------------|
| 英語教師のための基礎講座                                 |                   |
| 授業マネジメントの勤どころ：話し方の勤どころ (1)                   | 田邊祐司 12           |
| 評価クリニック なぜテストをするか                            | 根岸雅史 14           |
| 授業レポート                                       |                   |
| 「5つの提言」を受けて、今やるべきこと (3)                      |                   |
| — ICTの効果的な活用 ～ボイスレコーダーを用いた実践～                | 大岩樹生 16           |
| 小学校英語 Just Now                               |                   |
| 小諸市における外国語活動の取り組み                            |                   |
| — ALT配置に恵まれた町の問題点と可能性 —                      | 渡邊時夫 19           |
| 単語の文化的意味 84 pretty                           | 森住 衛 21           |
| Essay Helpless or Helpful                    | James Hershman 22 |
| 英語指導のスパイス                                    |                   |
| Bluetooth® will set you free! —スピーカー問題からの解放— | 亘理陽一 23           |

## やってみよう! 教室英語落語 DVD付き



大島希巳江 [著]  
Oshima Kimie  
A5判 128ページ  
定価(本体 2,000円+税)  
ISBN 978-4-385-36156-7

笑いとユーモアたっぷりに日本を紹介できる「英語落語」に、生徒と一緒にチャレンジしてみませんか。中高生にも取り組みやすい小噺・落語 15話と演じ方のヒントを掲載。著者による全話の実演と海外公演の様子を収めたDVD付き。

## 英語の授業を楽しくする 10分間の帯活動 「フリートーク」で表現力を育てる

ワークシートつき



小松原唯弘 [著]  
Komatsubara Tadahiro  
下都賀の英語教育を考える会 会長  
B5判 160ページ  
定価(本体 2,200円+税)  
ISBN 978-4-385-36558-9

中学英語教師である著者が開発した「フリートーク」を、手軽に授業で実践できるよう体系的に解説。ペア、グループと、段階的に発展する帯活動を通して、生徒の表現力を育成します。



# AROUND THE WORLD 27

## 北ゲルマン語を巡って [1]

### 英語に見る 北ゲルマン語

森 信嘉 Mori Nobuyoshi (東海大学)

かつて学生街に欠かせないものと言えば喫茶店と古書店であった。授業をさぼって古書店を渡り歩く。何とも優雅な気分になる。読んでみたい本を適当に買いあさり、ふらりと喫茶店に入って読みふけたものだ。掘り出し物が見つかったときの感激はいつまでも心に残る。今でも古書店巡りは楽しみの一つである。日本の地方都市に行っても、海外に向向いても必ず古書店を訪ねてまわる。東京の神保町は古書街として有名であるが、どういふ訳か西ノルウェーの片田舎に突如として神保町が出現した。人影まばらなフィヨルド沿いの村に誕生した「ブークビューエン (Bokbyen)」なる古書街である。bok は book, by は town, -en は the にあたるので、英語に直訳すれば「The Booktown」といったところだろうか。イギリスの地名である Derby, Rugby, Whitby 中の -by はバイキング時代に北ゲルマン語 (ノルド語) から英語に流入した語である。本来の語形は býr / bæer で、「農園」, 「屋敷」, 「町」などを意味した。

言語史的に古ノルド語は、西ノルド語 (ノルウェー語, アイスランド語, フェーロー語) と東ノルド語 (スウェーデン語, デンマーク語) に大別されるが、現代の分類では類型論上の類似点によりアイスランド語とフェーロー語を「離島ノルド語」, その他を「大陸ノルド語」と分類するのが一般的である。英語はドイツ語, オランダ語, フリジア語等と共に西ゲルマン語に属す。古ノルド語時



西ノルウェー, フィヨルド沿いの古書街

代の語彙は 1800 語程現代英語に残っているそうだ。動詞では cut, get, give, take, want など, 名詞・代名詞では both, sister, they, their, them など, 形容詞では odd, loose, ugly, weak などが一例として挙げられる。つまり, 英語学習の初期段階ですでに北ゲルマン語に触れていることになる。

最近, 「英語は北ゲルマン語である」という見方があり物議を醸している。主張しているのはノルウェー人言語学者であるが, この学者の説によれば, 英語は従来信じられてきたように古英語を継承する言語ではないとのことである。語彙の借用のみならず, 西ゲルマン語には見られないが北ゲルマン語には見られるというシンタックス上の英語との類似点を挙げて自己の主張を展開している。おかげでネット上では大騒ぎになっている模様である。この議論が今後どのような展開を見せるか予測できないが, あまり深入りせず今は静かにフィヨルド沿いの古書街に思いを馳せていた方が気が楽である。そういえば, fjord という語も古ノルド語起源であった。

#### 表紙写真 について

### 水の都で迷子を楽しむ

編集部

「迷子になるのを楽しんでくださいね」一。ヴェネツィアでは, それを観光客を街に送り出すときの合言葉のようだった。入り組んだ路地に入るとすぐに自分の居場所がわからなくなる。幅 1 メートル, どこにもつながらそうもない路地裏の小道が広い通りにつながったり, 角を曲がるといきなり運河が目の前に広がりに行き止まりになったり…。確かに, 街全体が巨大な迷路のようにつくりになっていた。

ヴェネツィアで一番有名な橋は, 大運河 (カナル・グランデ) に架か

るリアルト橋だ。中央に向かって高くなるアーチ型の橋で, 橋の上にも店が並んでいる。夕暮れ時には, リアルト橋から太陽が沈む様子を見ようと, カメラを持った多くの観光客でごったがえす。橋を渡りしばらく歩くと, 近くには, さまざまな魚介が並べられた魚市場があり, 日本の市場に近い光景が広がっていた。

中世のイタリアで海洋国家として繁栄をさわめた, 水の都ヴェネツィア。しかし, ヴェネツィアは 1797 年にナポレオンに攻められ, 国としての歴史は幕を閉じた。街のシンボ



ルとも言えるサンマルコ広場は, そのナポレオンによって, 「ヨーロッパでもっとも美しい広場」と称えられたといい, 今でもその面影は十分に残っている。

サンマルコ広場から, リアルト橋をめざして街歩きをする。ヴェネツィアングラスやレース編みなどを売るお店や雰囲気のあるレストラン, 気軽にふらっと立ち寄りそうなバルが, 世界各地からの観光客を迎えてくれる。地図をあてにしないで, 迷子を楽しむ, それがヴェネツィアの醍醐味だ。





## あなたのカウントダウンは、いつから？

奈良橋 陽子 Narahashi Yoko

70年代始めに海外から帰国してきた時、日本人の英語コミュニケーションレベルは大変低いと感じました。私の経験から、演劇や音楽を通して身体を使って英語を習うやり方が最も効果があると考えていましたので、幼児期からその方法で英語学習を始める環境を提供できたらと願い、1974年に英会話スクール、モデル・ランゲージ・スタジオ (MLS) を共同設立しました。頭と身体と心を全部使って、楽しんで英語を学ぶ！という指導法です。

80年代になって、より演技や演劇のトレーニングに特化した、新たな会社ユニテッド・パフォーマンス・スタジオを設立し、以降はそちらでの仕事を中心にりましたが、それでももちろん、日本における英語教育についてはずっと関心を持ち続けていました。90年代からは海外映画作品のキャスティング等の仕事で日本を離れることも多くなりましたが、日本人の英語コミュニケーション力は年々アップしているものと信じていました。

そして数年前、改めて英語教育の様子や実態を調べる機会があったのですが、日本はより保守的になっていて、若者の英語を話そうとか学ぼうという意欲が全体的に減少していると聞き、驚いてしまいました。10年前に比べ、海外で英語を学びたいという人、実際に留学する人の数が極端に減っているというのです。国際的な統計を見ても、日本の英語力はアジアの他の国の中でもかなり低い方にランキングされていると聞きました。

根本的に、英語を習う目的・必然性がなければ、上達意欲はなかなか維持できないと思います。何か深い興味があって、それに英語が関係していると

効果的ですね。

今、日本人はどこか受け身になっているのかもしれませんが。情報は全てインターネットにつながる指先であって、自分から進んで旅したり、人に会ったりする必要を感じなくなってきたように感じます。

心が何を求めているのか、自分自身の意欲をまず確認して、また探し出して、それに英語を関連づけていくというのはどうでしょう？ その意欲をもって、自分が心から欲しいと思うものを手に入れる旅に出かけましょう。そしてその過程で、英語を友達にしてください。

ある人は会社で、英語を学ぶという意志表示を書いたプラカードを首から下げて、100日間のカウントダウンを始めました。私は彼に、100日より1000日にしたら、と言いましたが、その意志表示を見た周りの人たちは皆、彼に達成してほしい、彼を応援したいという気持ちになりました。彼がその目標を達成した暁には、彼だけではなく私たち全員が、Champagne Time! ですね。

あなたのカウントダウンは、いつから始めますか？

### ならはし ようこ

国際基督教大学卒。NYで演劇を学び、数々の舞台を演出。映画監督、キャスティングディレクター、作詞家、俳優養成所・アップスアカデミー芸術監督等、多彩な顔を持つ。2013年にプロデュースした米映画「終戦のエンペラー」が話題に。

## 帯活動 — その正体と魅力

松沢伸二

(新潟大学)

## 1. 投げ込み活動と帯活動

筆者は1980年代に中学校の教壇に立ったが、当時は「帯活動」という言葉は使われていなかった。近頃よく耳にする帯活動とはどんな活動だろうか。

帯活動は「投げ込み教材」と関係がある。投げ込み教材には教科書内、教科書外、教師自作のものがある。教科書は通常のLessonとは別に、英語の歌、詩、ことわざ、名言、早口言葉などを掲載している。教師はこれらの教材を適宜授業に投げ込んで、生徒の英語への興味をかき立てることができる。NEW CROWNには“Sing”, “Stand by Me”, “Take Me Home, Country Roads”といった名曲が収録されている。ぜひクラスみんなで一緒に歌い、英語を学ぶ喜びを味わうようにしたい。

投げ込み教材は教科書外にも見つかる。例えば過日、地元の新聞の紙面に次の英文が載った(『週刊Let's えいGO!』『新潟日報』平成25年9月22日)。

The word “omotenashi” is drawing a lot of attention in Japan. Newscaster Christel Takigawa used it with a gesture in her speech at the IOC meeting in Buenos Aires.

この小中学生向け紙面には、単語の和訳、カタカナ発音、携帯電話で音声を聞くためのQRコード、英文の和訳、写真、背景知識の補充、さらに「今週の単語」として“attention”の解説がある。この種の記事を授業に投げ込めば、生徒は学習している英語が現実世界でリアル・タイムに使われていることを実感して、英語学習への意欲を増すであろう。

投げ込み教材は教師が作ることも多い。中学校1年生であれば、ローマ字のヘボン式と訓令式の違いを確認するハンドアウトや、既習の単語の発音と綴

りの関係をフォニックスの視点で整理するハンドアウトを作成したり、1人称・2人称・3人称の違いを視覚的に理解できるイラストを配ったりすることができる。こうした投げ込み教材は英語学習でのつまずきを取り除くのにも有効だ。

以上のように投げ込み教材は、様々な目的で、通常の授業から離れた内容を、単発的に扱う活動に用いる。英語教師は以前から投げ込み教材を使ってきた。国語や理科などの他教科の教師も、小学校や高校の教師も投げ込み教材を活用している。そして次に見るように、投げ込み教材を使う「投げ込み活動」を毎授業続けると、それは「帯活動」になる。

## 2. 単元計画と帯活動

NEW CROWNの単元は、「とびら、GET, USE, まとめ」で構成されている。1単元は通常9～11時間かけて指導する。例えばあるLessonの全9時間の単元計画を、A4用紙横1枚にまとめて書くとする。この場合、用紙の左端の上から下に第1時のWarm-upからConsolidationまでの授業構成を書き、同様に用紙右端の上から下に最後の第9時の授業構成を書く。

このとき、投げ込み活動を例えば毎時のWarm-upの後に10分程度行うと計画する(毎授業の場合は長い時間は割けない)。この9回の投げ込み活動をマーカーでハイライトすれば、それは単元計画において、横断的に細く長い「帯」を成す。

帯活動はこのような「短時間継続的に行う投げ込み活動」を指す学校英語教育独特のネーミングである。投げ込み活動が単発的で時間を長くとれるのに対し、帯活動は継続的で短時間行う。

### 3. Warm-up や Review と帯活動

帯活動は授業のどこで実施できるだろうか。ある教師は NEW CROWN の GET の左ページを、Warm-up → Review → Presentation (POINT) → Practice (Drill) → New Words (Words) → Reading (本文) → Consolidation と進めるだろう。別の教師は、GET の右のページも扱い(本文は2時間目に回す)、Warm-up → Review → Presentation (POINT) → Practice 1 (Drill) → Practice 2 (Word Corner と Practice) → Consolidation と進行するかもしれない。

こうした授業では帯活動を Warm-up や Review の代わりとすることができる。Warm-up には Warmer と Lead-in の2種類ある。Warmer は授業へのレディネスを形成するために行う。教師と生徒が英語で短い対話をしたり、簡単なゲームをしたりする。本時の授業の話題とは特に関連しない活動になる。Lead-in は本時の話題に関係する内容を扱う。例えば本時の Reading の文章がインターネットを扱っている場合、普段どのくらい何の目的でインターネットを使うか、ペアで短時間話し合わせて、本時の話題を個人的な問題として捉えるよう導く。

この2種類の Warm-up のうち、帯活動が代われるのは Warmer の方である。毎授業の冒頭で英語の歌を歌う帯活動には、英語への興味をかき立てる投げ込み活動の役割と、これから始まる授業に向けて心と体を整える Warmer の働きを期待できる。

Review には補強的なものとは拡大的のものがあ。補強的な復習は前時の学習内容を思い出し、定着させるのが目的である。機械的な口頭練習、音読、小テスト、ディクテーションなどを行う。拡大的な復習では前時までに習得した語彙や文法などを総合的に、できるだけ使用場面に近い状況で活用させる。前時よりも以前の既習事項も含めて言語材料を何度も練習させ、異なった場面で英語を使う経験を積み重ねて定着を期待する。インフォメーションギャップを利用した活動や空所補充会話などをする。

この2つの Review で帯活動に置き換えられるのは拡大的な復習の方である。毎回の授業で教師が示す話題についてペアで簡単な対話を行い、結果を

報告する Short Dialogue の活動がその一例である。この帯活動には、幅広い言語材料の定着という拡大的な復習の役割と、螺旋的に毎時間繰り返すことで「話せるようになった!」という有能感を生徒に与える投げ込み活動の機能を期待できる。

### 4. 帯活動の目的

これまでみた帯活動は、英語への興味をかき立てる、英語を学ぶ喜びを味わう、英語学習への意欲を増す、英語学習でのつまずきを取り除く、言語材料を定着させる、有能感を与える、Warm-up や Review の代わりとする、を目的としていた。さらに、中学校英語教育では他の目的でも行われる。

その1つは、生徒が苦手としていることを克服させるために行う帯活動である。生徒がカタカナ発音に終始し、英語らしいリズムを身に付けられない。これを克服するために、市販の教材を用いて毎授業の冒頭でチャンツに取り組ませる実践は、そうした帯活動である。ここには授業へのレディネスを形成するという Warm-up の目的を超えた意図がある。

別の帯活動では、教師が生徒に特に伸ばしたい技能に取り組ませる。「大勢の級友の前でスピーチができる生徒を育てたい。」これは多くの教師が抱く願いである。毎授業の冒頭で1人ずつ Show & Tell をさせる帯活動には、そうした願いをかなえる意図がある。生徒には、スピーチ原稿を書く、原稿を見ないで発話する練習をする、物を見せる・強調するなどのデリバリーに配慮するなど、拡大的な復習の範囲を超える学習が求められることになる。

### 5. 教師にとっての帯活動

帯活動が「短時間継続的に行う投げ込み活動」であるならば、帯活動を行う教師には投げ込み活動を選ぶ・作る自由が与えられていると言える。授業の10分を帯活動に、残り40分を教科書を使う指導にあてるとする。このとき教師には、全カリキュラムの少なくとも2割を自分で編成する裁量を与えられたことになる。目の前の生徒のニーズやウォンツ、さらには教師自身の好みや夢を勘案して、どんな教材・活動を投げ込むか。教師が自らの独自性を発揮し、創造性を生かせる点が帯活動の醍醐味だ。

## 「フリートーク」で表現力を育てる

小松原唯弘

(栃木県栃木市立大平中学校)

## 1. はじめに

「フリートーク」は、次の4つのねらいを達成するために、1年間かけて毎授業開始の10分程度で行う帯活動です。

- ・積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- ・「聞くこと」「話すこと」を中心としたコミュニケーション能力の基礎を養うこと。
- ・身近な人たちとよりよい人間関係を築くこと。
- ・グローバルな視野を持つことのできる資質を育むこと。

## 2. 「フリートーク」とは

フリートークの基本コンセプトは、「全生徒が参加でき、教師も継続的・段階的に指導できるコミュニケーション活動」です。このフリートークには、次の3種類の活動があります。

## ① Pair Talk

フリートークの中心的な活動です。生徒2人がお互いに向かい合って、「Pair Talkの進め方」のプリントを参考にしながら、いろいろなトピックについてアイコンタクトやジェスチャーなどを駆使し、英語で自分の考えや気持ちを伝え合います。また、相手のことについて質問したり、相手からの質問に答えたり、自分の意見や感想を述べたりしながら、4つのステージを追って進めていきます。

## 【Pair Talkの4つのステージ】

- 1st 1つのトピックに対して、Creative Plus Oneの1文を付け加えながらやりとりします。
- 2nd 1stの活動に加えて、会話の途中でトピックを変え、2つのトピックについてやりとりします。

3rd Follow-up Question (続きの質問) を使って質問し、Pair Talk を発展させます。

4th Impression (感想) を使って、自分の感想や意見を述べ、Pair Talk を深めます。

## ② Group Talk

3～5人のグループで、モデルダイアログ(Group Talkの進め方)をもとに、司会者を中心にトピックを変えながら会話をします。自分でターンを取って発話する部分がPair Talkとは異なります。

## ③ Speech

Pair Talk や Group Talk で活動したことのあったトピックについて、自分でスピーチ原稿を書き、それを発表します。人前で堂々と自分の考えや気持ちを正しく、わかりやすく伝える力を養います。

## 3. 「フリートーク」の実践

フリートークの活動の中心となるPair Talkでは、次の4種類のプリントを使います。

## Pair Talkの進め方

Pair Talkの4つのステージに対応した、活動のためのモデルダイアログです。このプリントを参考に、ペアでスキットをなぞって練習したり、自分たちのことに置き換えて会話したりします。

## Topic集

フリートークで扱う16のトピックについて、それぞれを深めるための語句・表現を収録しています。また、質問に答える際に、Creative Plus Oneで1文付け加えるためのプリントも含まれています。

## フリートークに役立つ表現集

会話をスムーズに進めるための表現集です。

## How are you?

活動の始めに行うあいさつのための表現集です。



Pair Talk の進め方①

---

## Sports (スポーツ)

**DIRECTION**  
**Don't be shy.** (はずかしがらないで。)  
 ・ジェスチャー、スマイル、アイコンタクトを忘れずに！  
 ・"Topic集"や、"Creative Plus One"を参考にして情報を追

**SCENE**  
 仲の良い二人がスポーツについて話をしています。

**Skit**

◆N: Hello, Yaguchi-san.  
 ○Y: Hi, Nagai-kun. How are you?  
 ◆N: I'm fine, thank you. How about you?  
 ○Y: I'm fine too, thank you.  
 Let's talk about sports.  
 I like badminton.  
 ◆N: (Pardon?) Oh, badminton?  
 ○Y: Yeah. **It's exciting.**  
**I am on the badminton team.**  
 ◆N: Uh-huh.  
 ○Y: How about you, Nagai-kun?  
 What sport do you like?  
 ◆N: Well, I like **track and field** because **it's fun**.  
**I run after school every day.**  
 ○Y: Oh, really? I see.  
 ◆N: Thank you very much.  
 ○Y: You're welcome.

Topic 集

---

## Sports (スポーツ)

**POINT**

Q: What sport do you like? あなたは何のスポーツが好きですか。  
 A: I like badminton **because it's interesting.**  
 My favorite sport is badminton **but I can't play it very well.**

**WORDS & PHRASES**

①  
 1. badminton バドミントン  7. softball ソフトボール  13. kendo 剣道

Creative Plus One

---

## Sports (スポーツ)

**【全般】**

1. I'm on the **badminton** team. 私はバドミントン部に所属しています。  
 2. I'm a **Giants** fan [supporter]. 私はジャイアンツのファン[サポーター]です。  
 3. My favorite **team** is **Kashima Antlers**. 私の好きなチームは鹿島アントラーズです。  
 4. I want to be a good **player**. 私は上手な選手になりたいです。

**【スポーツをする・練習する】**

5. **I play badminton** every day. 私は毎日バドミントンします。  
 practice judo [kendo] 柔道 [剣道] をする (練習する). run five kilometers 5キロ走る.  
 swim for 2 hours 2時間泳ぐ. do 50 push-ups 50回腕立て伏せをする。

Pair Talk の活動では、1トピックにつき12回を目安に活動を行います。まず前半では、「Topic集」、「フリートークに役立つ表現集」、「How are you?」のプリントを、それぞれ練習します。生徒たちの理解や定着を考え、多少時間はかかっても、それぞれのプリントをクラス全体やペア、個人で、くり返し音読練習します。ここで多くの表現が言えるようになれば、ペアの相手の言うことも理解しやすくなり、その後の活動をスムーズに進めることができます。

後半では、「Pair Talk の進め方」を使ったペア活動を行います。最初のうちはどうしても、プリントを手を持って読んだり、覚えた対話のパターンを言い合ったりすることになります。しかし、最終的な目標として、プリントを持たずに、気持ちのこもった対話ができるよう、徐々に活動を高めていきます。たとえば、ALTとJTEとの対話のモデルを見せるなど、生徒たちに具体的な目標を示すことで、モチベーションを高めることにもつながります。また、ペア活動ということ言えば、パートナーが言葉に詰まったり、流れがわからなくなった場合などは、日本語でもよいので、互いに教

え合い、助け合わせることも必要です。

最後に、練習の成果をクラスの前で発表したり、ほかのペアの発表を見たりする機会を与えます。そうすることで、「イントネーションに気をつけて言うと相手に伝わりやすい」とか、「声が大きくジェスチャーも効果的」などの感想が出ることもあります。また、発表を見る際にリスニングカードにメモさせることで、ただの発表会ではなく、クラス全体が「学び合いの場」となり一体感が生まれます。

#### 4. おわりに

毎年の授業アンケートでは、90%以上の生徒が「フリートークが楽しかった」と答えてくれています。今後も、フリートークを通して、生徒たちと英語によるコミュニケーション活動を楽しんでいきたいと思えます。

なお、Group TalkやSpeechを含む活動の詳細については、拙著『英語の授業を楽しくする10分間の帯活動「フリートーク」で表現力を育てる』（三省堂）を参照いただけたら幸いです。

# USE Readへ繋ぐ語彙習得 —単語クイズを使った4ステップ—

吉永早紀子

(大分県中津市立本耶馬溪中学校)

## 1. 授業における語彙習得のあり方

学習指導要領の改訂により、授業時数は105時間から140時間、語彙は約900語から約1200語となりました。授業時数が増えたとは言え、3年間で1200語を教え、その習得と定着を目指すにはどうするのか、と常に悩むところだと思います。単語に限らず、「先週教えたのに…」と、学習した内容を覚えていない生徒の様子にがっかりすることもよくあるものです。

しかし、当然のことながら一度見ただけの外国語を覚えらるるはずはありません。それなら、覚えらるるよう「出会う回数」を増やせばいいのではないのでしょうか。例えば、50の単語を6回に分け6時間かけて教えるのではなく、50の単語を繰り返し6時間に渡り学習していくという具合に。ここでは「定着は繰り返し」という視点から模索した「帯学習としての語彙習得方法」をご紹介します。

## 2. NEW CROWNの構造を活かして

NEW CROWNの教科書は、平成24年度の改訂で大きく構造が変わりました。比較的短い会話や文章から成るGETを終えると、USE Readと題した長文(3年生にもなれば200~300語)が現れます。従来の自分のスタイルで扱えば、文章を区切りながら数時間に分けて学習する授業でしたが、それではUSE Readの良さを活かすできませんでした。

公立高校入試問題では、今や500語近い長文が出題されます。「まとまった量の文章を読む力」が求められ、そのためには語彙力が不可欠です。例えば、3年生Lesson 7のUSE Readでは、約20の新出単語が導入されます。たとえ単語の意味調べを宿

題にしていたとしても、学習したばかりで発音も意味もよくわからない単語が並ぶ中では、読解に大きく躓く生徒が出てしまいます。語彙の習得・定着、そして、生徒が「読解」に踏み出せるだけの語彙を持ってUSE Readに臨めるようにしたい。そこで行ったのが帯学習の単語クイズです。

## 3. 単語クイズを使った語彙習得の4ステップ

語彙習得の帯学習を単語クイズとして、4つの段階を設定します(①発音②和訳③英訳④英訳筆記)。これは、ペア活動としてパートナー同士で採点し合い、授業始めにテンポ良く4~5分程度で行います。

### ①発音のA段階

まずは、英語を見て正しく発音します。家庭学習用に、50語のカタカナ読みと和訳が載っているプリントを事前に配っておきます。単語クイズを始める数日前の授業で配り、数回だけ教師について発音練習をやっておくと、たいていの生徒は事前に自分なりの練習をしてきます。A段階は、英語を発音するだけなので、難易度を見て60~70秒で切ります。

### ②和訳のB段階

次は、英語を見て日本語の意味を答えます。「みんな日本語話せるんだからできるぞ!」なんて声をかけながら頑張らせると、「あーなんだっけこれー!」など、自分の記憶と闘いながら生徒は頑張ります。ここからは、制限時間を90秒とします。

### ③英訳のC段階

最後は、日本語を見てその意味する英語を答えます。A段階で覚えた発音、B段階で一致させたその日本語の意味から、一見難易度の高そうな単語でも生徒は予想以上にスラスラと答えていきます。



④筆記テスト

C 段階を終えた数日後、50 問一気に筆記テストを行います。クラスの実態や生徒の学習段階に応じて、10 問ずつ、半分ずつなど区切ることもありますが、最後に筆記テストがあることを生徒に知らせておけば、毎日の自学で生徒は練習してきます。

<単語クイズのポイント>

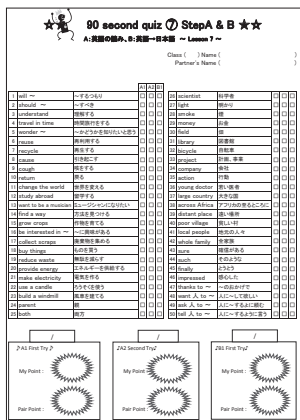
- ・ABC の各段階を、それぞれの段階での伸びが分かるよう 2 回ずつ計 6 回行うこと
- ・スコアの変化がわかるように常に 50 点満点とすること、また、タイムを意識できるように 90 秒 (A 段階は 60 ~ 70 秒) の制限時間を設けること
- ・教科書 USE Read の読解に入る頃に C 段階が終わるようタイミングを合わせて行うこと
- ・ペアのスコア合計が 100 点満点になるようにし、パートナーのスコアやその伸びもお互いに意識して高め合えるようにすること
- ・「前回の自分を越えること」が一番大切であり、周りとの比較ではなく個々の「伸び」を評価すること

4. 単語クイズ作成にあたって

クイズの作成時、いくつか気をつけるべきことがあります。1 つは、50 問全てを新出のものにしないということです。レッスン毎に区切ると、50 問全てが新出単語になることはほぼありません (前述した 3 年生 L7 の新出単語は約 40 語)。新出単語に加えて、既習の頻出単語や比較的覚えやすい単語などを交えておくと、生徒が学習しやすくなります。

また、動詞はよく一緒に使われる目的語、形容詞はよく一緒に使われる名詞などと合わせると、意味

だけでなく使い方も学習することができます。例えば 3 年生 L7 の USE Read には、'I want to build a windmill company that provides energy to people across Africa.' という文があります。ここでは



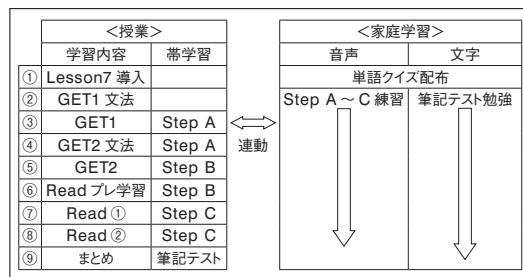
単語クイズ 採点用紙例

windmill, company, provide の 3 つが新出単語ですが、

- ① windmill → build a windmill (既習の動詞と)
- ② company → company (日本語でも耳慣れた単語なので 1 語のみで)
- ③ provide → provide energy (目的語と一緒に) といった感じで出題します。

5. 単語クイズを行うタイミング

3 年生 L7 を 9 時間計画で指導する際、学習内容、帯学習、さらに、期待される家庭学習の連動は、以下のような図で表すことができます。



USE Read に入る授業あたりで単語クイズの C 段階を終えられるよう、逆算して帯学習をスタートします。そうすることで、授業と並行して新出単語を習得していくことができ、また、必要な語彙を備えた上で USE Read の読解に挑むことができます。

6. おわりに

単語クイズを始めた頃、ほとんどの生徒は「こんなにたくさん無理！」と弱腰でした。しかし、「何回もやるうちに意外と覚えられる！」「教科書がよくわかるようになった！」という声次第に上がり始め、活動が定着してきた頃には、5 分前に教室に入るとほとんどの生徒がブツブツと練習するようになっていました。

単語クイズを終え教科書に向かう生徒にとって、新出単語は既習単語であり、「この単語わかる！」「この文章の意味わかった！」という喜びや自信に繋がります。教科書から語彙を習得するのではなく、既に習得した語彙で教科書を読み取る。英語「で」学ぶ読み物としての教科書も、面白いものです。

【参考文献】  
田尻悟郎 (2009). 『(英語) 授業改革論』教育出版.

## 表現活動につながる帯活動

竹原春祥

(群馬県高崎市立大類中学校)

## 1. はじめに

今年度、関東甲信地区中学校英語教育研究協議会が群馬県で開催された。これを機に、新教育課程での週4時間体制を生かした効果的な指導の工夫をテーマに、県下で実践的な研究が行われた。

私も一分科会に携わる1人として、大会の研究主題「基礎・基本を身に付け、伝えたい事柄を英語で豊かに『発信』する生徒の育成」、分科会主題「語彙・語法の習得と定着を促す効果的な指導と評価の工夫」を念頭に置き、日々の授業改善に取り組んできた。ここでは、その取り組みの一端を紹介する。

## 2. 語彙・語法の習得と定着

## (1) 言語習得の流れを意識した言語活動

語彙・語法の習得と定着を促すためには、「習得→定着→活用・運用」という段階を踏んだ指導が大切であると考えた。そして、言語習得の過程を「インプット→インテイク→アウトプット」として捉え、それぞれの段階での言語活動の工夫と、それぞれの段階のつながりに重点を置いて授業実践を行った。

主な手立てとしては、図1のように、習得、定着、活用・運用の段階にインプット、インテイク、アウトプットの流れをあてはめ、授業の展開や単元の指導計画に言語習得の流れを意識した言語活動を取り入れた。特にインプット、インテイクの段階では、アウトプットの段階の言語活動で用いる語彙・語法の習得と定着を図ることができるよう工夫した。

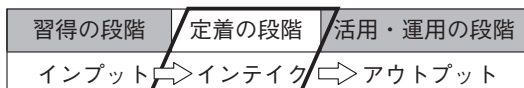


図1 習得・定着・活用の段階と言語習得の流れの関係

## (2) 習得と定着のための「帯活動」

語彙・語法の習得と定着の段階で、短時間継続して繰り返し行えるような活動を帯活動として行った。数多くの活動(練習)を、毎回の授業の最初の5分、長くて10分程度で行えるように工夫した。帯活動では習得・定着のための活動を十分行い、最終的には活用・運用の段階での表現活動につなげていくことを目的とした。

## (3) 帯活動の具体例

## 「ティーチャートーク」(聞くことの活動)

既習表現を聞かせて確認させたり、これから学習する表現を意図的に聞かせたりする活動。既習(その単元で学習したものとそれ以前のもの)の語彙・語法を使った表現を含みながら、教師がショートトークを行う。

## 「How many sentences?」(読むことの活動)

英文を繰り返し読んで覚える単元の導入段階で行う活動。既習の語彙・語法が入っている英文のリストから、2分程度でいくつ言うことができるか、ペアでチェックしながら行う。

## 「シャドーリーディング」(読むことの活動)

既習の語彙・語法が含まれている教科書や教師が用意した教材を音読する活動。教師やCDの音声に続いて、チャンクで区切って読んだり、文全体をリピートしたりして、いかに正確に読めるかを、ペアで確認しながら行う。

「プラスワン」(話すことの活動)

一問一答の対話ではなく、会話を続けられるようにするための活動。1つの質問(話題)に対して、自分の意見などを含んだ2文以上で答えられるようになることを目指し、ペアで協力して行う。

「Why-Because」(話すことの活動)

1つの質問に対して、自分の考えを入れて答えることができるようにするための活動。理由を問うようなテーマを決めて Why-Because を会話の中に取り入れ、ペアで協力して行う。

「ピクチャーテリング」(話すことの活動)

授業等で活用したピクチャーカードや教師が用意したものを使い、描かれている内容を説明する活動。既習の語彙・語法を使った英文を、ペアで協力してその場で考え、絵を見ながら説明する。その後、ペアで説明内容の確認をする。

「ディクテーション」(聞くこと・書くことの活動)

既習の語彙・語法が含まれている教科書や教師が用意した英文を、教師が読んだりCDで流したりした音声を聞き取り、書く活動。訂正等はペアで行う。短時間でできる活動。

「ピクチャーライティング」(書くことの活動)

ピクチャーテリングと関連した、書く活動。既習の語彙・語法を使い、絵についての説明をその場で考えて書く。書かれた英文は、教師・生徒がチェックする。書く分量の目安は、学年に応じて設定する。

「3文ライティング」(書くことの活動)

単元ごとに、場面やテーマを設定し、「事実・出来事・つぶやき」の3点について書くドリル的な活動。それぞれ1文で書くようにする。必要に応じて、日本語で課題を提示してもよい。ペアで発表させたり、「聞くこと」や「話すこと」の活動と関連を持たせると効果的な活動。

上記の「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の活動を、単独で行ったり、組み合わせて行ったりして、毎時間5分から10分程度で行うとよい。例えば、内容に関連を持たせて、「聞くこと」→「書くこと」や「話すこと」→「書くこと」のように指導していくようにする。

また、一単元の中で繰り返し継続して活動を行っていくことが肝要である。帯活動で身に付けた語彙・語法を、活用・運用の段階で最大限活用して表現できるかが大切だと考える。

3. 帯活動を行っての成果

毎時間繰り返し継続して帯活動を行ったことで、各単元の活用・運用段階の活動で、生徒一人ひとりが自信を持って楽しそうに活動を行うことにつながっていると、生徒の表情などから感じた。また、使用されている語彙・語法については、帯活動で生徒の頭の中に蓄積されたものが、活用・運用段階の活動で使われていることが、生徒の発話などから見とれた。

4. おわりに

毎時間の帯活動を単なるパンプラクティスやドリルで終わらせるのではなく、ここで習得し定着した語彙や語法を、活用・運用の段階での表現活動につながられるかを考えたうえでの活動にしていかなければならない。そのためには、一単元の構想をしっかり持ち、「身に付けた語彙・語法を使えた」という達成感や充実感を生徒自身が持てるように活動を行っていかねばならないと考える。

また、各時間の帯活動に関連性を持たせ、それぞれの活動ごとに言語の使用場面や働きなどを考えた工夫をし、生徒が実際の場面で使えることを考えて指導していかねばならないと思う。

今後も私自身、関東甲信地区中学校英語教育研究協議会で研究したことや、他の英語教師との連携・情報交換から得られることを生かして、日々の授業改善を図り、わかる授業、楽しい授業を行えるように研鑽に努めていきたい。



## ライティングのプロジェクト型の帯活動

神原克典

(兵庫県西宮市立大社中学校)

## 1. はじめに

帯学習を取り入れることで、生徒たちに普段の授業で学んだ知識を実際に使う(復習・活用する)場を提供できる。本稿では、ライティングのプロジェクト型の帯学習を紹介する。

ライティング活動では、言いたい表現を探す中で、特定の文法項目を定着させたり、辞書や参考書といった学習リソースを利用させたりできる。まとまりのある文章を書く活動は、連続する数時間を使うプロジェクトで行うことが多いが、その一部を各授業の十数分に分散して帯学習で行うこともできる。

## 2. 実践例の紹介

## — 「トライやる・ウィーク」

## (1) 帯活動の実施期間等について

中学2年生の1学期後半に(6月中旬から7月にかけて)、のべ10コマを、週4回の授業のうち、2～3コマの授業を用いて実施した(全コマではないのは、授業進度との兼ね合いから)。

作文を書き進める時間は、各コマ15分程度とした。後半の9コマ目、10コマ目あたりでは、制作物を仕上げ、クラスの仲間の作文の鑑賞会を行ったので、ほぼ授業時間の全て(50分)を用いた。

## (2) ライティング活動のトピックについて

作文のトピックには、学校行事として実施された「トライやる・ウィーク」の振り返りを選んだ。「トライやる・ウィーク」とは、兵庫県で実施される、中学2年生が学校を1週間離れ、地域の中で職場体験を行う活動のことである。本校では、5月下旬に実施された。

## (3) 目標(ねらい)と方法

生徒の作文は、清書したあと、「トライやる文集(Try-Yaru Report)」という名前で、作文集として印刷してまとめ、生徒全員に配布することを事前に予告した。その文集の鑑賞会をゴールとし、以下のような5つのステップを踏み、プロジェクト型—計10コマのライティング活動の計画を立てた。

| 時  | 活動の内容  |
|----|--|
| 1  | idea map を書き、どんな内容の作文にするか                                    |
| 2  | 構成を練る【Step 1】  |
| 3  | 1～2文ずつ書き進めていく【Step 2】  |
| 4  |  |
| 5  |  |
| 6  |  |
| 7  | 先生に提出した原稿を返却してもらい、文法的な誤りや表現方法についてのアドバイスを参考にrewriteする【Step 3】 |
| 8  | イラストなどを含め、清書する【Step 4】                                       |
| 9  |  |
| 10 | 印刷された「トライやる文集」を製本し、鑑賞会をもつ【Step 5】                            |

上記の流れは大まかなものである。また、生徒によって作文を仕上げる進度が異なるため、rewriteについては、放課後のライティング指導を数回行い、個別の生徒の質問に対応した。

## (4) 各活動の内容と指導について

## a. 企画構成とidea mapの作成

「トライやる・ウィーク」でどのような事業所にお世話になり、どのような体験活動をしたか、印象に残ったことは何か、など、10文程度の英文で表現するため、idea mapを作成させた。まず大まかな構成を考えることから始めた。idea mapでは、事業所名を中心に置き、そこから枝分かれてして1週間の体験活動のハイライトを思い起こさせた。

次のようなidea mapをノートに書かせてから、下書き原稿に日本語文と英語文を書かせていった。



b. 作文

《下書き》 まず、日本語で言いたいこと（書きたいこと）を10文程度書かせた。その際、生徒にはできるだけ英語の語順で日本語を書くことを奨励した。

日本語文が10文完成したら、1コマに2文程度ずつ、英文を書いていく作業を進め、4コマ程度を用いて、下書きを完成させた。

【書き始めの例】

僕は / 行った / 小学校に / トライやるウィークで  
I went to elementary school for Try-Yaru week.

《添削》 下書きの際、生徒たちは頻繁に辞書を引き、語句や例文を参考にしながら、言いたい表現を探し、書き進めていった。教師は机間指導しながら、生徒の質問に答え、適宜アドバイスを施した。40人弱のクラスの生徒数から、限られた時間内に全員の質問に答えることは難しいため、帯活動の最後に添削を希望する生徒は下書き用紙を提出させ、教師が英文にアドバイスを書き（動詞が過去形になっていない箇所にアンダーラインを引く／抜けている前置詞を書き足す／意味が通らない文に波線を引き、「？」マークを書く、など）、次時に返却した。

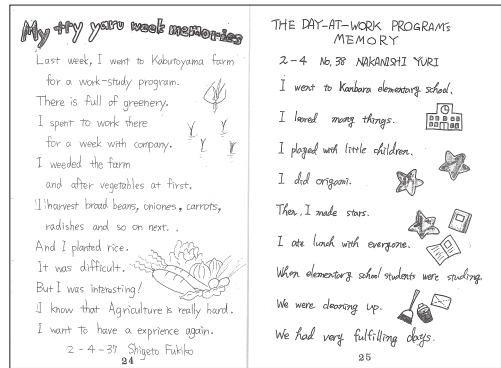
c. 口頭でのアドバイス・添削

中学2年段階の英語の文法事項と語いで表現できる内容は限られている。日本語でなめらかに書けることがそのまま英文にならない場合も多い。そこで、口頭や添削での生徒へのアドバイスは、出来る限り生徒が言いたい内容が何か、個々の生徒と対話した。その際、英語表現が複雑になりすぎず、かつ生徒も納得できる表現をともに考えた。ただ、未習の英語文法（to不定詞／SVOO表現／受動態など）を用いたほうが適切だと判断した場合には、個々の生徒にその文法の構造を簡単に説明し、教師主導のアドバイスを施した。

d. 作文集の制作

下書きが完成した生徒から清書用紙を渡し、イラストやタイトルを付け加えて、文集用の清書を書か

せた。そして印刷した下書きを印刷し、授業の中で製本した。



e. 鑑賞会

製本した「トライやる文集」の鑑賞会を行うとともに、企画全体を通しての振り返りアンケート（自由記述方式）を実施した。

3. おわりに

今回紹介したライティングのプロジェクト型の帯学習は、主に生徒に過去形を使った文で自己表現をさせたいことが、当初の教師側のねらいとしてあった。その意図通り、多くの生徒が、errorを繰り返しながらも、過去形の文を書くことで、英語の時制についての知識を深めた。しかし、アンケート記述を読むと、単に過去形の理解が進んだということよりも、これまでに習った文法が実際に使えたという喜びや実感、日本語を英語に変換することの難しさと、それでもやり遂げた充実感などが書かれていた。細かく生徒が書いた英文を見ると、local errorが多く残っており、正確性をあげる課題は残っている。しかし、辞書を使って自分で調べさせたり、言いたい内容に寄り添って教師がアドバイスすることで、読み手を意識して英語で「表現しようとする」意欲が養われるのではないだろうか。

ある生徒の感想にこうあった。

「いつも作文などは日本語で書いていたので、英語になると一気に難易度が上がる気がします。けれど、自分が（日本語で）表現している言葉と一致する（英語の）単語を見つけるのはとても面白いと思いました。」

通常の授業も進めつつ、適宜帯活動を取り入れることで、このように感じる生徒を増やしていきたい。

# 授業マネージメントの勘どころ： 話し方の勘どころ(1)

田邊 祐司 Tanabe Yuji  
(専修大学)

## 1 はじめに

話し方は授業マネージメントに大きく関わる大切な領域です。それにもかかわらず、教員養成課程で真正面からこれを取り上げた講義を受けた記憶は私にはありません。みなさんはいかがでしょう。等閑視されてきた感がある領域ですが、熟練教師3人の勘どころはいかなるものなのでしょう。今回は話の構成、声や姿勢、立ち位置など、いわゆるプレゼン技術を、当然挙げてくるのだらうと予想していましたが、これが「あにはからんや」の世界で、彼らが指摘したのは話し方以前の問題でした。

## 2 信念

虚を突かれた最初の勘どころがこれです。先生達が指摘したのは教師側の教えようとする「意欲」の大切さでした。A先生は次のように語っています。

教師の語りの根幹にあるのは何としても生徒に「力を付けさせる、力を伸ばしてやる」との信念、熱意とでもいうべきものと思います。教師ならおよそ誰もが持ち合わせているとは思いますが、最近は事情が違ってきています。マニュアル通りに、知識の伝授を、それも機械的に行う教師が増えていくと強く感じるのです。その話しぶりには覇気がない。昔、「デモシカ教師」や「サラリーマン教師」というフレーズが流布した時代がありましたが、今はその「3代目」が現場に押し寄せているのです。こうした経験から、教師の話し方について意見を求められるときには、まずこのキホンのキへの「原点帰り」の大切さを強調するようにしています。

3人ともこの見解に大きく首を縦に振っていたの

が印象的でした。C先生もこう続けました。

そうした先生方へ伝えたいのは、教師側の教えたいという気持ち(ある教育学者はこれを「教える側の意欲」といっています)は、たちまち生徒に伝わるという事実です。そういう内面からわき上がる思いがあって初めて、話し方の構成やdelivery(伝達)などの技術論に行けると思います。

彼らの話を聞いて、ともしれば技術面を追いがちなところがある私は、ハッとしました。いろいろな要因が複雑に絡み合っているのですが、確かに「デジタル世代」「草食世代」に育った若手教師の中には、「生徒の力を伸ばすんだ」という祈りにも似た信念をもとにして、生身の人間である生徒と接した体験が少ないのかもしれませんが。世間一般に言われる若者の「コミュニケーション能力不足」は、やはり教育界にも押し寄せていると感じた次第です。

## 3 自信

2つ目の勘どころも想定外。彼らの教える内容に対する確固たる自信に関するものです。まずは、B先生のことばです。

「英語に自信があるかないか」ということを、プロの英語教師に問うのは失礼なことかもしれませんが。それでも英語は生き物です。これまで事実だと思ってきたことが、時代の流れとともに崩れる場合だってあるのです。例えば、初めて人に会ったときの挨拶の定番を「How do you do?」と教えてきました。しかし、これが生徒同士となると、いかに奇妙に響くかというのに気づいたのは、恥ずかしながら最近のこと



でした。語用論的な情報は、自分で意識的に update していかないと言語事実は伝えられないし、自信が揺らいでしまいます。また、この自信のなさというものは、話し方に反映され、即、生徒に伝わります。

C 先生も同じく「自信の有無は話し方に出来ます。自信がないものは語りへは昇華されません。信念とともに、自信は話し方の両輪の一つだと思います。」と述べ、技術論偏重へと警鐘を鳴らしています。これにも一本とられた思いです。

#### 4 指導案

年間計画やレッスンごとの指導案をきちんと把握していることも、話し方に影響を与えると彼らは考えています。まずは B 先生のことばです。

年間計画は、学校の授業の進度、学習の到達度に関連し、それに合わせて授業デザインをしていくための「大枠」です。問題になるのは、各教師の授業展開をイメージした授業案で、私たちはこれを「小枠」と呼んで細心の注意を払っています。ベテランになったら、この小枠を省略してもいいと考えていると、それはとんでもないこと。授業の「導入」「展開」「まとめ(終末)」の小枠がしっかりしていてこそ、メリハリのある話し方ができるのです。

これに A 先生は次のように続けました。

伝統的な指導案では、何となく頭に授業イメージが残りやすく、自前で適当な指導案を作成していました。そんなとき、田邊先生から教わったのが「パラグラフ・チャート(パラチャート)」です。これは、高校向けに学芸大の先生方を中心に考案された授業の大まかな流れを図式化したチャートです(金谷(編), 2011)。図式化の良さは、“WYSIWYG (What you see is what you get.)” です。つまり、パッと見てその授業の流れを把握できることです。これがあると授業の構成がすっきりと頭に残り、その分、話し方にもメリハリが出てきたと思います。

このように、指導案がしっかりできていると、自分に余裕ができ、その分話し方の技術面にも気を配ることができるのです。

#### 5 教材研究

最後の勤どころは、「自信」と密接に関係する教材研究です。C 先生のことばです。

自分のバイブルとしているのが、以前、田邊先生が『英語教育』(大修館書店)で紹介された『わたしの英語遍歴—英語教師のたどれる道』(田中, 1960)です。その中に、テキストを一字一句漏らさず、徹底的に調べ上げて授業に臨み、語源から文法事項まで、生徒達から矢継ぎ早に質問を浴びせかけられ、それを乗り切ったあと、学校裏の丘の上で「勝った!」とつぶやく場面があります。徹底的な教材研究は、教師の話し方を論じるためには、なくてはならない勤どころだと思います。それは教師の話し方に迫力をもたらすと考えています。

田中菊雄に言及していただき感激です。教科以外のことばで忙殺され、教材研究にじっくりと時間をとることができないのが現状ですが、そんな中にあっても教えることをしっかり事前におさえる。この基本が話し方の素地になるという考えには全面的に賛同します。

以上、お三方ともに話し方の前段階での勤どころを挙げられたわけですが、まずは生徒を伸ばそうとする「意欲」、そして普段から学び続けることによって形成される「自信」。さらに、綿密な「授業地図」とともに、綿密な「教材研究」。どれもこれも当たり前のことかもしれませんが、そうしたことが実は教師の話し方を成功させる勤どころであるという指摘には、ただただ脱帽です。今回は、話し方そのものの勤どころを取り上げてみます。

#### 【参考文献】

- 金谷憲(編著) 高山芳樹ほか(著)(2011). 『高校英語授業を変えよう! 訳読オンリーから抜け出す3つの授業モデル』アルク.
- 上篠晴夫(2010). 『教師の話し方 スピード★上達法 すぐ生かせる36のコツ』たんぼ出版.
- 齋藤孝(2004). 『齋藤孝の相手を伸ばす教え方』宝島社.
- 田中菊雄(1960). 『わたしの英語遍歴—英語教師のたどれる道』研究社出版.



# なぜテストをするか

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

## 1. なぜテストをするか—建前

「なぜテストするのか。」これまでに何度かこの問いを英語の先生方に向けたことがある。というのは、どうもその根本的なところで、私たち言語テスト研究者と現場で生徒に直接英語を教える先生方とで、意識が違っているのではないかと思っていたからである。

現場の先生方のこの問いへの答えはどのようなものだったろうか。表現は様々だが、およそ次の5点に集約できる。

- ・生徒の能力を知るため
- ・成績をつけるため
- ・指導の成否を知るため
- ・生徒の診断をするため
- ・生徒に勉強させるため

テストをするのは、生徒の能力を知るため、その結果をもとに成績をつける。また、単に成績をつけるだけでなく、その結果から、教師が自分の指導を振り返ったり、生徒の英語力の診断を行ったりする。さらに、テストをすることで、生徒に勉強をさせることにもなる。

これらは見事な模範解答である。おそらく、教室で実施する言語テストに関して書かれた専門書であっても、目的に関しては、およそこんなところであろう。もっとも、言語テストの文献であれば、「生徒に勉強させるため」というのは、「いい波及効果を得るため」というような言い方になるであろうが。

では、現実のテストは、そのような目的をきちんと達するようなテストになっているであろうか。成績は、つけなければならないのだからつけているだ

ろうが、その他はどうだろう。

- ・生徒の能力をきちんと知れるテストになっているか
- ・指導の成否を知れるテストになっているか
- ・生徒の診断ができるテストになっているか
- ・生徒にいい勉強をさせる(いい波及効果を得られる)テストになっているか

生徒の能力をきちんと知れるということは、観点別の評価であれば、それぞれの観点および技能から見たときに、生徒の英語力がどうなっているかがわからなければならないということだ。また、指導の成否を知ったり、生徒の診断をしたりするには、観点や技能について、クラス全体および生徒個人の英語力の状況を知ることができなければならない。そのためには、何を測ろうとしているのかが明確でない総合問題のような問題形式ではダメだろうし、仮に問題形式は統一されていても、そこに含まれる問題のテスト・ポイントがバラバラでもダメだろう。

このような適切な問題構成がなされた上で、結果を分析する際は、大問のテスト・ポイントごとに結果を解釈していかなければならない。つまり、ある大問の出来がクラス全体としてよくなかった場合は、指導に問題があったか、指導しようとした事柄自体の難易度が高かった可能性が高い。それに対して、クラス全体として問題がなければ、ある大問の出来がよくないことは、生徒個別の問題として解釈されなければならないだろう。

波及効果については、テストをすると言えば、生徒は勉強するだろうという想定がある。近年では、テスト前でもそれほど勉強しない生徒がいるという

話は聞かないでもないが、問題はむしろ、生徒がどのような勉強をどのくらいしているのかを、意外と教師が把握していないという点だ。英語が苦手な生徒は、勉強の仕方が分からず、教師が想定していないような勉強に時間を費やしていることもある。いい波及効果を得るには、到達目標を生徒と共有し、その目標への到達の仕方を伝えることだろう。

## 2. なぜテストをするか—本音

「なぜテストするのか。」この問いに対する英語の先生方の答えには、「教師の本音」が垣間見える。前述の答えの中で、しばしば聞かれたのが「授業でやったことをきちんと覚えているかどうかを確認するため」や「自分の授業をまじめに聞いていたかどうかを確認するため」という言葉であった。

最初のうちは、これらの答えを自明のこのように思い、聞き流してしまっていたが、実はここには重要な本音が隠れているのではないかと思うようになってきた。それは、テストで測っているのは、「授業で教えたこと」そのものであるという点である。

言語テスト研究においては、近年、「言語テスト研究者」は、「教師」に自分たちの研究をきちんと伝えてきたのかという議論が起こっている。つまり、「言語テスト研究」の世界の議論は、ほとんどの「教師」には届いていなかったのではないかという反省である。

「言語テスト研究」でよく言及される「妥当性」や「信頼性」といった基本概念をとってみても、教師との思惑のずれが見える。「妥当性」とは、「測ろうとしている能力をテストが測っているか」を表し、「信頼性」とは「測ろうとしている能力を安定して測っているか」を表している。これらの概念の大前提は、テストでは何らかの「能力」を測ろうとしているということである。英語のテストであれば、「英語力」を測っているという前提である。

しかし、前述の教師の答えは、テストで測っているのは、「授業で教えたこと」であって、「英語力」ではない。「(英語の) 授業で教えたこと」は「英語力」だと思われるが、実際はそう単純ではない。多くの場合、「教師が自分の英語の授業で教えたこと」は、とりもなおさず、「教科書の内容そのもの」を意

味している。だからこそ、定期試験には教科書の本文が載り、その内容についての問いがなされるのだ。そうなると、それはそれで整合性があることになり、少なくとも妥当性のある問題ということになってしまう。

しかしながら、「教科書を教えるのか、教科書で教えるのか」という議論を思い出してほしい。英語の授業でやっているのは、『ハムレット』や『源氏物語』といった作品そのものを読むことではない。教科書に文章が載っていたにしても、それは何らかの「英語力」をつけるための道具である。こう考えれば、テストでは、「本来つけようとしていた力」を見なければならない。そして、その力を見るためには、授業で教師に習った既習の文章をそのまま用いたのではダメで、「本来つけようとしていた力」がつかいければ生徒が読めるようになっているはずの文章を出さなければならないのだ。

テストで教科書の内容そのものを出さないことには、多くの教師は抵抗感があるだろう。生徒が自分の授業を聞く意味を見いだせなくなってしまうと考えるからだ。しかし、本質的には、英語の授業は英語力をつけるためのものである。教師の日本語訳を忠実に再生させるだけのテストは、もはや「英語力を測るテスト」ではない。

テストが生徒をコントロールするためのツールではなく、本来のツールとして機能するためには、「本来つけようとしていた力」が本当についているのかを見なければならない。そして、そのためには、ある意味、未習の文章やタスクをテストに出さなければならないだろう。ただし、そのときに非常に重要なのは、生徒に対して、授業のねらいと評価の方法について、きちんと伝えるということだ。それができなければ、生徒は定期試験を単なる実力問題と捉え、従来やってきたような「試験勉強」をまったく放棄してしまうかもしれない。その意味では、新たなテストに向けての、「試験勉強のモデル」の提示も必要だ。

このアプローチは、従来の多くの教師の慣習を変える大手術かもしれない。しかし、これはやっかいな病巣を取り除くために、必要な手術だ。



# 『5つの提言』を受けて、 今やるべきこと(3)

## —ICTの効果的な活用

### ～ボイスレコーダーを用いた実践～



大岩 樹生 Ohiwa Tateo (新潟県新潟市立白新中学校)

#### 1. はじめに

「ワークをどの程度指導に生かしていますか。」

ワーク、単元ごとの復習プリント、リスニング教材など様々な補助教材を教材費から購入している学校が多い中、果たして、それらをどのくらい学習指導に生かしているか。ワークは、定期テストの際に回収、点検し、学習プリントは、テスト直前に配布し、授業で少しばかり解説をする。せいぜい、この程度ではないだろうか。少なくとも私はこの程度だった。

ところで「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」の提言3に「ALT, ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす」とある。今回は、ICTの活用の一つとして、ボイスレコーダーを用いた実践について紹介する。

#### 2. 実践のきっかけ

教科書本文を自力で音読できない生徒が多く、読めないのにスペルを覚えようとしている実態を見て、愕然とした。授業で繰り返し指導用CDを聴かせたが、状況は変わらなかった。

そこで、ボイスレコーダーの活用を思いついた。中学生の時、LL (Language Laboratory) 教室があり、各自のペースで繰り返し聞き、音読練習したのをよく覚えている。ボイスレコーダーの音声は予想よりはるかに明瞭で、扱いやすく、Portable Language Laboratoryのような物であると感じている。

私は今年度、1学年を担当している。年度当初に教材費で購入したのは、ペンマンシップ(210円)とボイスレコーダー(3,400円)だけ。ワークや単元ごとの復習プリントは、3年間一切購入しない。

#### 3. 指導の実際

授業ではオリンパス製(OLYMPUS Voice-Trek DP-201)のボイスレコーダーを使用している。液晶画面が大きく操作が楽、再生スピード変換が可能(0.5, 0.75, 1.25, 1.5, 2.0倍速)、そして長時間(100時間)の録音が可能である。

以下、具体的な指導例をもとに紹介する。

##### (1) ディクテーションにおける活用

後期より、生徒に Dictation Booklet (資料1参照)を配布し、週1回程度、授業の最初の5分で、ディクテーションを行っている。あらかじめ、教師の音読を録音しておき、生徒は繰り返し聴きながら、20語程度の文章を聴きとる。音声を聴くことが苦手な生徒は、再生スピードを変えたり、特定の部分を繰り返したりして、なんとか聴きとろうと頑張っている。また意図的に未習語を入れ、音から単語を推測する機会も設けている。その後、和訳や解説のページを参照させ、重要語句や文法などをスパイラルに復習させている。

##### 【資料1】

|   |  |    |
|---|--|----|
| 5   | A: What time do you get up every morning?<br>B: I get up at six-thirty.<br>A: You get up early. I get up at seven.   | 22 |
| 6   | A: What do you have in your pocket?<br>B: I have many CDs.<br>A: What music do you like?<br>B: Japanese pops.  | 18 |
| A: あなたは毎朝何時に起きますか?<br>B: 6時30分に起きます。<br>A: 早く起きますね。私は7時に起きます。<br>A: ポケットに何を持っている?<br>B: たくさんのお金だよ。<br>A: どんな音楽を聴く?<br>B: J-popだよ。 | ◎ 数字: 1 one 2 two 3 three 4 four 5 five 6 six 7 seven 8 eight 9 nine 10 ten 11 eleven 12 twelve 13 thirteen 14 fourteen 20 twenty 40 forty 100 hundred 1000 thousand<br>◎ 時間帯: morning - noon - afternoon - evening - night - midnight<br>朝 午前 正午 午後 夕方 晩 夜 深夜<br>◎ wake up「目を覚ます」→ get up「起きる」→ go to bed「寝る」→ sleep「眠る」<br>◎ a few 「2, 3の」, some「いくつかの」, any「(疑問文で)いくつかの」, many「(数えられる名詞の前について)多くの」, much「(数えられない名詞の前について)多くの」, a lot of ~「(可算, 不可算に)強固な」多の<br>◎ × What do you like music? 必ず what sports / what food のように、必ず what の後にジャンルを示す単語を付ける。 |    |

(2) 単語の発音指導における活用

筆者の音読指導を振り返ってみると、文字と音声をつなぐフォニックスの指導が不十分だったと反省している。そこで、本年度は年度当初から、継続してフォニックス指導を行っている。段階的にフォニックスシート（資料2参照）を配布し、単語の範読を録音し、何度も聴かせ、英単語が読めるよう、音読指導の充実を図った。

《資料2》

Phonics 3

**No. 3 早い者勝ち二重母音**

母音が連続で重なった場合、前の母音のみ「名前読み」で読み、後の母音は読まない。【w】、【j】は半母音と呼ばれ、子音の中でも母音に近い音とされる。

|          |      |  |
|----------|------|--|
| ai<br>ay | 【ei】 | daily, paint, rain, Spain, train<br>always, way, day, display, gray                            |
| ea<br>ee | 【i:】 | beach, Beatles, clean, dream, easy, sea, tea<br>beef, beetle, free, green, street, sweet, tree |
| ie<br>ye | 【ai】 | tie, pie, lie<br>dye, rye, bye   |
| oa<br>ow | 【ou】 | coat, toast, coast, boat, goal, road, goat<br>grow, low, slow, snow, window, yellow, rainbow   |

例外1 : iではなく、eの方を「名前読み」するパターン

|    |      |  |
|----|------|--|
| ie | 【i:】 | field, piece, priest, shield, chief, thief |
|----|------|--|

※ friendのみ、eを「あだ名読み」する

例外2 : yを【j】と読むパターン

|    |      |                         |
|----|------|-------------------------|
| oy | 【ɔi】 | soy, toy, coy, boy, joy |
|----|------|-------------------------|

(3) 個別指導における活用

自己紹介のスピーチや Show and Tell などを行う際、あらかじめ生徒に原稿を書かせ、それを暗記させる。しかしながら、生徒は自分の書いた原稿を読むことができない。このような経験は誰にでもあるだろう。ここでも、ボイスレコーダーが役に立つ。

原稿ができあがった生徒から、教師はその場で、ボイスレコーダーに原稿の範読を録音し、何度も聞かせ、練習させる。録音してしまえば、教師は slow-learners の個別指導に専念でき、しかも一人一人の練習量も確実にUPする。また、授業中では、すべての生徒の発音やイントネーションをブラッシュアップするのは難しいが、音読をボイスレ

コーダーに録音させ、授業後に一人一人のボイスレコーダーを聞くことで、時間を有効に使うことができる。

(4) コミュニケーション活動における活用

学級全体で、インタビューなどのコミュニケーション活動を行う際、アイコンタクトを徹底させるために、ワークシートを持たずに回らせ、自席に戻ってからその回答を記述させたいのだが、プリントを手放せない生徒がいる。また、プリントで遮られ、アイコンタクトが成立しないペアもよく見る。

この原因として、「対話例を覚えていない」とこと「いちいち自席に戻るのが面倒である」ことの二つが考えられる。

対話例（資料3参照）を板書し、部分的、段階的に消して対話を覚えさせた上で、ボイスレコーダーを持たせれば、アイコンタクトを図りながら、対話をスムーズに進めることができる。インタビューの対話を一気に録音し、自席に戻って再生し、答えをワークシートに記述する。この際、生徒は自分の質問が対話例通りにできたのかについても、客観的に把握することができる。

《資料3》

**Let's interview!**

Ask your friends about their breakfast and make a report.

|   | Name | Time | Food | Others     |
|---|------|------|------|------------|
| 1 | Mike | 6:30 | rice | like bread |
| 2 |      |      |      |            |
| 3 |      |      |      |            |

～対話例～

A: What time do you eat breakfast?  
B: I eat breakfast at about 7.  
A: What do you eat for breakfast?  
B: I eat bread.  
A: Do you like bread?  
B: Yes, I do. I live it very much.

1について

Mike eats breakfast at 6:30.

He eats rice for breakfast.

But he likes bread.

2について

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

3について

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

#### 4. 実践の成果と課題

音読を一斉指導で行うと、どうしても口バクの生徒が出る。口バクは何百回、何千回行っても効果は期待できない。ボイスレコーダーでは、すべての生徒が自分の理解度に応じて、スピードや音量を変えたり、分かるまで何度でも繰り返したりすることができ、音読における一斉指導の限界を補ってくれる。

ボイスレコーダーの使用が奏功し、生徒がとにかく教科書本文をよく読むようになった。教科書本文を暗記している生徒も多い。先日、授業者が矢継ぎ早に課題を課した際、ある生徒が“*That's enough!*”と教科書本文で用いられた表現を用い、クラスが笑いの渦に包まれた。教科書本文で用いられている英文を、自然に用いている姿に、手応えを感じた。

半年間ボイスレコーダーを使用した上で、その効果に関して、アンケートを行った。すると、ボイスレコーダーの効果について、実に9割の生徒が肯定的な回答をし、次のように記述した。

- ・1回聞いたただけだと、忘れたり、覚えられないので、とても助かっています。
- ・簡単に使え、覚えられるので、ワークより良い。
- ・自分で読んだりするよりも正しい発音が聞けるし、その発音が身に付いてくるので、とても役立ちます。書き取りの時、速さの調節ができて、自分なりのペースで英語の学習ができるので、ワークを買うより良いと思います。
- ・英語は話さないと覚えられないので、ボイスレコーダーはいい方法だと思う。

ボイスレコーダーの有効性を実感し、「ボイスレコーダーを使った問題をもっと増やしてほしい」と記述した生徒がいた反面、他教科でワークを使用していることから、次のように記述した生徒も数名いた。

- ・ワークはやっぱりほしいです。でも、ワークを買わないなら、先生が作った問題集をたくさん出していただければいいです。
- ・「ご自由にとって」みたいな練習問題をください。

授業者自身、ボイスレコーダーの有効性を認識しつつも、その使用において煩瑣な点も感じている。たとえば、全員のボイスレコーダーを机上に並べ、一気に録音ボタンを押す。間違っただけで音読したり、録音ボタンが押されていないボイスレコーダーがあったりしたら、悲劇だ。

また、これは実際に当校であったことだが、ボイスレコーダーを悪用した生徒が出た。悪用があったからと言って、機械を取り上げ、全員が使用できないようにするというのは、違う。大切なのは、間違っただけで起きたときに、なぜいけないのか、本来の使用目的は何なのかなど、丁寧に話し合い、集団としてルールを確認することである。

もちろん、3年間ワークを購入しないのだから、生徒の要望にもあるように、知識、理解の定着に関して、別の策を講じる必要がある。単元の終末に、自作の問題集を配布している。3年分作成するのは容易ではない。しかしながら、教員経験の少ない初任者ならまだしも、経験年数を重ねていけば、何十回と作成した定期テストの問題を集めればいい。むしろ、自分で単元ごとに問題集を作成すれば、それと類似の問題を定期テストで出題すればいいのだ。

#### 5. おわりに

ボイスレコーダー購入の3,400円は高いか、安い——もちろん、景気も良くなく、消費税の引き上げもあり、この値段は決して安くはない。だからこそ、副教材には、生徒の学力向上に資する物を本気で選定し、有効活用する必要がある。

ICTと聞くと、すぐにコンピューターやデジタル教科書などを想起する。しかしながら、どれも一斉指導に有効な物ばかりだ。一斉指導には限界がある。UDL (Universal Design for Learning : 学びのユニバーサルデザイン) の視点から考えた時、個々の生徒のニーズに応じて、速度を変えられたり、何度も聴けたりするなど、個別指導に生かせるICT機器こそ、今の時代に求められているICT機器であると考えられる。

今後その効果を最大限に引き出し、生徒の英語力を更に伸ばしていきたい。

# 小学校英語 Just Now

## 小諸市における 外国語活動の取り組み —ALT配置に恵まれた町の 問題点と可能性

渡邊 時夫 Watanabe Tokio  
(信州大学名誉教授)

### 1. はじめに

筆者の住む長野県小諸市の外国語活動の現状と取り組みについて紹介したい。

小諸市には6つの小学校と2つの中学校がある。小学校には全体で3名の専属のALT (Assistant Language Teacher) が、そして中学校には各校に1名のALTが配置されている。小諸市は、「信州教育」の中の「信州教育」を自負し、「雪に耐えて梅花麗し、霜を経て楓葉紅し」の精神を尊しとする「梅花教育」を伝統として、教育に熱を入れている地方都市である。市民は教育に熱心で、市民がボランティアとして始めた「市民大学」は33年間続いており、毎年120名程の受講者を誇っている。筆者はこの町で生まれ育った恩返しに今年「保護者のための外国語活動」を提案したところ、小諸市教育委員会は早速実践し、小学校5・6年生の児童を持つ多くの保護者に楽しんでいただいた。

筆者はここ数か月にわたり、連日のようにすべての小学校の外国語活動の授業を参観する機会を得た。Team-Teachingに関わっているHRT (Homeroom Teacher) とすべてのALTとの対話を通していくつかの問題点に気付いた。それらの問題点は、小諸市に特有というよりは、外国語活動に関して多くの小学校に共通している課題ではないかと考えている。

### 2. 外国語活動

#### —Team-Teaching が抱える問題

HRTによっても差はあるが、外国語活動やALTとのTeam-Teachingについて多くのHRTは悩み、不安、不満などを抱えている。また、ALT側からも発言いただいている。

#### (1) HRTの悩み

- ① 多忙で外国語活動の準備等の時間がない。空き時間がなく、外国語活動の授業の直後にALTと授業の振り返りや次回の予定について話し合いたい、その時間が取れない。
- ② 英語の運用力が不足しており、短時間でALTと話し合うことができない。また、主体的になって授業を進めなければならないことは承知しているが、英語力が不十分なため、思うようにALTをリードすることができない。
- ③ 本意ながらALTに頼りきりになってしまっている。その結果、ALTの授業の進め方に問題があっても見過ごしてしまいがちである。
- ④ ALTは、*Hi, friends!* (文部科学省) に沿った年間のカリキュラムを下地にしているようだが、カリキュラムやトピックの選択に関してALTや他校としっかり検討したことがない。しかし、中学校との接続を考えても、市内の小学校が共通したカリキュラムに沿って外国語活動を進める必要があるのではないか、という不安を持っている。
- ⑤ 小学校における英語教育の必要性を強く認識しており、自分の英語力を磨かなければならないと思っているが、研修の時間が取れないで、悩んでいる。

#### (2) ALTの発言要旨

- ① HRTにもっと積極的に授業に参加してほしい。
- ② 授業の後に一緒に振り返りをしたいが、HRTにはその時間を取ってもらえない。
- ③ 授業に真剣に取り組んでいない児童が気になる。しかし、しっかり指導ができないHRTがいる。
- ④ Teaching Planを事前に渡しても、当日持つ



てこないHRTがいる。

### 3. 具体的な対策

(1) 両者の不安や不満の分析—対策を求めて

両者の不安、不満、相手に対する要望などを大胆に下記の通りにまとめることができる。

- ① HRTは、主体的に授業に取り組みたいと願ってはいるが、英語力に自信がないため、どうしても消極的になってしまっている。
- ② 学習に対して消極的になったり、自信を失いつつある児童に気付いてはいるが、注意したりするとどうしても日本語を多用することになり、つい傍観者のな態度をとってしまっている。
- ③ 時間がなく、複雑な内容の話し合いはできないので、一つの授業のパターンを示してもらえば、授業力がアップするまで、ALTと相談しながら進めたい、という願いを抱いているようである。
- ④ ALTは、一人で説明するよりはHRTと協働して英語で活動のモデルを示すなど、工夫をすれば児童たちの英語理解が深まるだろうと期待している。
- ⑤ ALTは、HRTが児童たちの前に立って、積極的に英語を使う時は、児童たちの集中力が高まることに気付いている。
- ⑥ 協働しながら授業を進めることができれば、HRTの授業への関心や熱意が高まり相談もしやすくなると考えている。

(2) 具体的な提案

ALTとHRTの両者に次のような具体的な提案を示した。

- ① ALTは授業の少なくとも1日前に、HRTに英語で書いたTeaching Planを渡す。
- ② HRTは、Teaching Planについて、事前にコメントをALTに伝える。
- ③ 授業が始まると同時にHRTはALTと並んで児童たちの前に立ち、本時の主な活動を英語で伝え、例えば、Let's teach together, shall we?と言って授業に入る。
- ④ 授業の過程では、HRTは、各種活動ごとに、ALTと二人で活動のモデルを示したり、英語の

理解が難しそうな児童を発見したら、ALTに再度、できれば発想を変えて説明を繰り返すようサジェスションを与えるなど、(机間巡視等の必要な時を除き)できるだけALTの隣に立って、簡単な英語を使って授業のかじ取りを行う。

- ⑤ 授業の終わりには、児童に向かって例えば、We did many activities today. Did you have a good time? What activity did you like (the best)?などの言葉で「振り返り」を行い、ALTに、Please give a short comment. などALTにも振り返りの機会を与えて、授業を締めくくる。

なお、ALTには英語で、HRTには日本語で、指導案と授業を行うに際しての注意事項などを作成して渡し、互いに理解を深めた合った上で授業実践に入った。このような経過を経て進めたためか、3名のALT同士、あるいは提案者である筆者とのメール上の意見交換が頻繁に行われるようになった。

下記に、Teaching-Planの活動部分だけを示す。

| ALTの活動   | HRTの活動   |
|--|--|
| Hello everyone, let's enjoy English.<br>1. What are we doing today?  | Hello everyone, let's enjoy English.<br>2. (read menu)   |
| 2. I'm hungry, thank you. And you?<br>4. See you.  | 1. Hello Mr. Cini. How are you today?<br>3. I'm happy, thank you.<br>5. See you.   |
| What day is it today?<br>What is the date?   | What's this? It's a calendar.<br>Let's see, it's May 24th.   |
| 1. Hey ... (先生). Do you like my T-shirt design?<br>3. Really? What shape do you like?<br>5. What color do you like?<br>7. Do you like my new T-shirt?    | 2. No I don't. I don't like green circles.<br>4. I like stars.<br>6. I like yellow.  |
| What color do you like?<br>I like red. I like blue. → I like red and blue.<br>.....<br>I like green. I like yellow. → I like green and yellow.           |  |
| 2. OK, ... What shape do you like?<br>4. What color do you like?   | 1. Let's design a T-shirt.<br>3. I like triangles.<br>5. I like ...  |
| Praise kids  | 褒める  |
| 3. Everyone enjoyed Bingo game. That's very good. I am very happy that you asked me many questions in English. Everyone did good job. See you next week. | 1. Today we studied many things. What did you like? Choose two things.<br>2. Godfrey, how was the lesson? Please give your short comment. See you next week. |

※数字は、両者の話す順序を示す。

### 4. 結果

授業については大きな変化が見られた。ほぼすべてのHRTが上記Planに沿って、英語を積極的に使いながら授業をするようになった。ALTも「分かってもらえる英語」に一層工夫するようになり、児童たちの注意力も格段に上がったようである。

# Helpless or Helpful

## James Hershman

(former Higashiosaka City Nisshin HS AET, current Osaka Prefecture Ikuno HS NET)

When tragic events occur in the world they often make us feel helpless and hopeless about our fate on this planet. On March 11, 2011 just such an event devastated the Tohoku area on the East coast of the Japanese mainland. A large earthquake was followed by a terrifyingly destructive tidal wave which took nearly 20,000 lives, displaced roughly 340,000 people from their homes and caused a nuclear disaster that has yet to be completely resolved almost 3 years later.

It has been difficult for many of us to wrap our minds around this event and whether there is anything that we can do that would make the slightest difference for those affected. On that day in March, as I watched buildings, homes and cars being swept around like so much flotsam and jetsam, I felt much like I did on a day in September nearly 10 years prior as I watched two planes slam into the World Trade Center in New York; helpless. The two events occurred for vastly different reasons but my helplessness felt the same. Events like that often tend to make us feel helpless for a while after they occur. If we try, though, we can be helpful. It is not always easy to know what we should do or how we should do it. Through this disaster I learned that putting into action your desire to help is what matters, whatever form that action may take. It was my two young sons that taught me this lesson not long after the tidal waters had receded back into the vast Pacific Ocean.

As a way of motivating my boys to be on their best behavior, I use an application on my iPod that awards stars for good behavior. At the end of each day I sit down together with my boys and go over what rules they followed and those they didn't. On a day when their behavior has been excellent, they can earn up to ten stars. Their "total star count" is saved in the application and they can use the stars like money to buy snacks, toys, books or games. They look forward to using their stars in this manner as it gives them a sense of

accomplishment. The reward they get helps to motivate them to continue their good behavior. They had already saved up several hundred stars at the time of the Tohoku disaster. My older son was intent on purchasing a new game for his Nintendo DS while my younger son had his sights set on new Pokémon cards.

A few weeks after the Tohoku disaster, we had planned to go shopping and my sons were going to use their stars to buy the game and cards. To my complete surprise, my older son said that he no longer wanted to buy the game and said instead that he wanted to donate his stars to help the people who were suffering in the Tohoku region. My younger son quickly agreed that he too wanted to give up his precious stars for the same purpose. My wife and I had recently cancelled a trip to a nearby hot spring resort and had decided to donate that money to the relief effort in Eastern Japan. This was not really a significant sacrifice for us as we could reschedule the trip at any time. However, for my two young sons, who had worked hard for months to be on their best behavior to earn the stars they had saved, this was a real sacrifice.

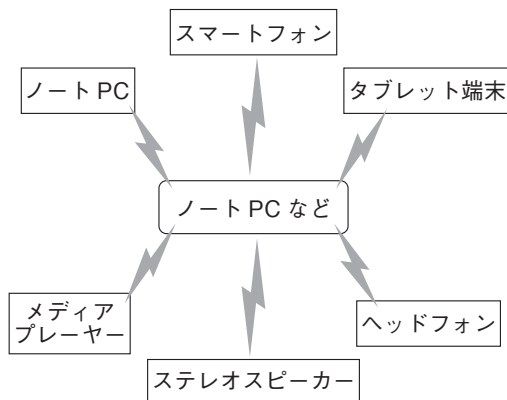
This coming spring will mark the third anniversary of that terrible day in Eastern Japan. There have been a great many acts of generosity and kindness from people in many parts of the world since then. It is easy to miss the beauty and generosity in each act. If the sacrifice you make is small or large is of no consequence as every contribution will eventually add up for those in need. Looking into the eyes of my children as they wished to make a difference in their own small but personally significant way, I was moved, and learned that we are not helpless if we have a true desire to be helpful.



黒板とチョークさえあれば（あるいは何もなくても）生徒を惹きつける授業ができる。「教師の力量」の一つの指標と言ってもいいかもしれません。一方で、スマートフォンやタブレット端末などのツールが、善かれ悪しかれ、かつてのCDや電子辞書の登場以上のインパクトを持って授業や生徒の日常に浸透しつつあります。

ICT機器を使うだけで生徒の学びが劇的に変わるわけではありません。しかし、こうしたツールを一切知らずに黒板・チョークにこだわることと、知っていて（必要に応じて）黒板とチョークを選択できるのではまったく違います。特に英語の指導・学習においては、ICT機器活用によるサポートが、教師の自由度を高め、生徒の選択肢を広げる可能性を持っています。

最近ではタブレット端末の導入に関する話を多く耳にしますが、端末そのものと同じか、あるいはそれ以上に私が注目しているのは、多くの機器に搭載されたBluetooth®機能が授業にもたらし得る変化です。Bluetooth®機能とは、スマートフォンやタブレット端末などから、ケーブルを使わずに接続し、音声・画像等のデータをやりとりすることができる機能です。



授業で利用していて特に便利だと感じるのは、スピーカーです。ノートPCやタブレット端末、スマートフォンからワイヤレスで音声を出力することは、教師がスピーカーから離れて自由に行動できるということを意味します。

例えばリスニングの音声をくり返し聞かせたり、複数の音声を連続して再生したりする場合、タブレット端末やスマートフォンに音声データを入れておけば、教室のどこにいても音源の選択や再生・停止等の操作ができます。再生速度を調節するアプリもありますから、机間指導をしながら生徒が聞き取れなかった箇所にとって繰り返し再生することも容易になります。

スピーカーに飛ばせるのは、リスニングの音声だけに限りません。事前に録音した自分の声や、辞書アプリのモデル発音、活動中のBGM、開始・終了を知らせるチャイムなども、同じ1つのスピーカーから流すことができます。接続先が固定されるわけではないというのもBluetooth®機能の強みです。

もちろんBluetooth®機能を利用しないとしたことが実現できないわけではありません。上の例でいえば、ラジカセのリモコンを用いれば同じことはできるでしょう。しかし、Bluetooth®機能搭載のスピーカーがあればこうした面倒をなくし、授業中の教師の動線をよりシンプルかつ自由にすることができます。機器の配置や操作の制約で生じる無駄が、案外生徒の集中力を削ぐ要因になると思うのですが、いかがでしょうか。

今はまだ現実的ではないかもしれませんが、端末をグループや各個人で利用している環境であれば、席に座ったままスピーカーに接続して、それぞれの端末で録音・録画した音声をクラス全体で共有するといった使い方もできるでしょう。

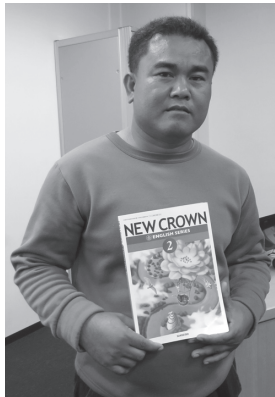
## 「アキ・ラーさん講演会」報告

## NEW CROWN BOOK 2のLET'S READ 2

に登場するアキラさんが、昨年秋に来日し、全国5か所で講演をされました。講演はおもに英語で行われましたが、講演後には参加者と日本語でやりとりをするアキラさんの姿も見られました。

## ●アキ・ラー（通称アキラ）さん

アキラさんは幼少の頃に両親を軍に殺され、その後は兵士として育てられました。初めて銃を持った時の話、友人を亡くした話、捕虜になった話、叔父に敵として遭遇した話、など、その当時のエピソードを、たくさんお話していただきました。戦場でのエピソードは過酷なものばかりでしたが、中には笑いを誘うエピソードもいくつかあり、アキラさんの優しさを垣間見ることができました。



実際にお会いしてみても、アキラさんはとても気さくで優しい方という印象でした。(NEW CROWNとのツーショットも快く引き受けてくださいました。) そんなアキラさんの人柄が、いろいろな人を引き寄せ、地雷のない世界を目指す大きな力となっているのかもしれない。

ない世界を目指す大きな力となっているのかもしれない。

## ●タアン・ラー（通称アラン）さん

アキラさんの博物館で育った、アランさんもお話をされました。アランさんは生後4ヶ月の時、彼を抱えて逃げていた母親に爆弾があたり、右腕を失いました。家の畑を手伝い、学校に通えずにいたところ、アキラさんに会ったそうです。そんな彼の現在の夢は、戦争被害で体が不自由になった人たちが働きやすい会社を作ることだと言います。勉強中だという日本語で、自分の思いを伝えるその姿にとても感動しました。



アランさん(写真左)とアキラさん  
アキラさんは、2010年にCNNの世界の十大ヒーローのうちのひとりに選ばれました。

## ●地雷がなくなるまで

講演の途中、地雷処理の実際の映像が流れました。防具を身に着け、地雷原探知機を使いながら、1メートルずつ慎重に作業を進めていきます。一人で一日およそ25平方メートル。映像で流れた現場は、すべての地雷を撤去するまでに1ヶ月かかったそうです。

地道で、一歩間違えれば自分の身にも危険が及ぶ作業。緊迫した空気は、画面越しにも伝わってきました。爆破処理の場面では、「パーン」という乾いた爆発音とともに落ち葉が一気に舞い上がり、地雷の威力と恐ろしさを実感しました。

殺すことではなく、怪我をさせることが目的の「悪魔の兵器」。一度地中に埋められると半永久的に作動します。戦争が終わっても地雷がある限り、人々はその存在に怯えながら暮らさなくてはなりません。すべてはカンボジアの人々が安心して暮せるためと、アキラさんは今でも地雷を掘り続けています。

(編集部)

もっと詳しく知りたい方はこちら  
NEW CROWN BOOK 2 LET'S READ 2  
『Landmines and Aki Ra』原作本

『アキラの地雷博物館と

こどもたち』

アキ・ラー [編著]

地雷博物館をつくり、地雷で手足をうばわれたこどもたちを育てる、元少年兵アキラさんによる手記。

